

「外郎売りの科白」

「ういろうりのせりふ」

二代目 市川團十郎

拙者親方と申すは、お立ち会いの中にご存知のお方もござりましようが、
せっしゃ おやかたと も一すは、おたちあいのうちに ごぞんじの おかたも ござりましょ一カ、

お江戸を発って二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて
おえどをたつて 20り かみかた、 そ一しゆ一 おだわら いっしきまちを おすきなされて

青物町を登りへおいでなされるれば、欄干橋虎屋藤衛門、
あおもちよ一を のぼりへ おいでなされるれば、らんかんばし とらや と一えもん、

只今は剃髪致して円齋と名乗ります。
ただいまは て一はついたして えんさいと なのります。

元朝より大晦日までお手に入れますこの薬は、
がんちよ一より お一つコもりまで おてにいれます このくすりは、

昔、ちんの国の唐尽、外郎という人、わが朝へ来たり、
むかし、ちんのくにの と一じん、ういろ一とゆ一ひと、わかちよ一へきたり、

帝へ参内の折りからこの薬を深く籠め置き、
みかどへ さんだいのおりから このくすりを ふかくこめ置き、

用ゆる時は一粒ずつ冠の隙間より取り出す。
もちゆるときは いちりゆ一ずつ かんむりのすきまより とりいだす。

依ってその名を帝より「とうちんこう」とたまわる。
よつて そのなを みかどより 「と一ちんこ一」とたまわる。

即ち文字には「頂き・透く・香ひ」と書いて「とうちんこう」と申す。
すなわち もんじには いただき すく におい とかいて 「と一ちんこ一」とも一す。

只今は、この薬、事の外世上に弘まり、方々ににせ看板を出し、
ただいまは、このくすり、ことのほか せじよ一にひろまり、ほ一ぼ一に にせかんばんをいだし、

イヤ小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと、色々に申せども、
いや おだわらの、はいだわらの、さんだわらの、すみだわらのと、いろいろにも一せども、

平仮名をもって「ういろう」と記せしは、親方円齋ばかり。
ひらかなをもって ういろ一と しるせしは、おやかた えんさいばかり。

もしやお立ち会いの中に、熱海か塔の沢へ 湯治にお出でなされるか、
もしや おたちあいのうちに、あたまか と一のさわへ と一じにおいでなされるか、

又は、伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされますな。
または、いせ ごさんぐ一のおりからは、かならず かどちか一いなされますな。

お登りならば右の方、お下りなれば左側八方が八つ棟、
おのぼりならば みき一のかた、おくだりなれば ひだりか一わ はっぼ一カ やつむね、

表が三つ棟、玉堂造り、破風には菊に桐のたうの御紋を御赦免あって、
おもてカ一 みつむね、ぎょくど一づくり、はふには きくに きりのと一の ごもんを ごしゃめんあって、

系図正しき薬でござる。
け一ず ただしき くすりでござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、

いや さいぜんより かめ一の じまんばかり もーしても、

ご存知ない方には、正身の胡椒の丸呑み、

ごぞんじないかたには、しょーしんのこしょーのまるのみ、

白河夜船、さらば一粒食べかけてその気味合いをお目にかけてみましょう。

しらかわよふね、さらば いちりゆー たべかけて そのきみあいをおめにかけてましょー。

先ずこの薬をかように一粒舌の上へのせまして、

まず このくすりを かよーに ひとつぶ したのうえに のせまして、

腹内へ納めまするとイヤどうも言えぬは、

ふくないへ おさめますると いや どーもいえぬは、

胃・心・肺・肝がすこやかになりて

い・しん・はい・かんか°すこやかになりて

薫風候より来たり、口中微涼を生ずるが如し。

くんぶー のんどより きたり、こーちゆー びりよーをしょーずるか°ごとし。

魚鳥・茸・麵類の食い合わせ、その外、万病速効ある事神の如し。

ぎょ ちよーきのこ・めんるいの くいあわせ、そのほか、まんびよー そつこーあること かみのごとし。

さて、この薬、第一の奇妙には、

さて、このくすり、だいいちのきみよーには、

舌のまわることが、銭独楽がはだしで逃げる。

したのまわることか°、ぜんこ°まか° はだしで にケ°る。

ひよつと舌がまわり出すと、矢も楯もたまらぬじゃ。

ひよつと したか° まわりだすと、やもたても たまらぬじゃ。

そりゃそりゃ、そらそりゃ、まわってきたわ、まわってくるわ。

そりゃそりゃ、そらそりゃ、まわってきたわ、まわってくるは。

アワヤ候、サタラナ舌に、カ牙サ歯音、

あわやのんど、さたらなぜつに、かケ°さしおん、

ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、

はまの ふたつは しんの けいちよー、かいこ°ー さわやかに、

あかきたなはまやらわ、おこそとのほもよろお。

あかきたな はまやらわ、おこそとの ほもよろお。

一つへぎへぎに へぎほし はじかみ、盆豆 盆米 盆ごぼう、

ひとつ へき°へき°に へき°ほし はじかみ、ほんまめ ほんこ°め ほんごぼー

摘み蓼 つみ豆 つみ山椒、書写山の社僧正、

つみだて つみまめ つみざんしょ、しょしゃざんの しゃそーじよー

粉米のなまがみ 粉米のなまがみ こん粉米の小生がみ、

こ°めの なかまか°み こ°めのなまか°み こんこ°めの こなまか°み、

繻子・ひじゆす・繻子・繻珍、

しゆす・ひじゆす・しゆす・しゆちん、

親も嘉兵衛 子も嘉兵衛、親かへい子かへい 子かへい親かへい、

おやもかへー こもかへー、おやかへー こかへー こかへー おやかへー、

古栗の木の子切口、雨合羽か番合羽か、

ふるくりのきの ふるきりくち、あまか°つぱか ぼんか°つぱか、

貴様のきやはんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆、
 きさまの きやはんも かわきやはん、われらか° きやはんも かわきやはん、

しっ皮袴のしっぼころびを、三針はり長にちよと縫うて、
 しっかわばかまの しっぼころびを、みはり はりなか°に ちよと ぬ一て、

ぬうてちよとぶんだせ、
 ぬ一て ちよと ぶんだせ、

河原撫子 野石竹、のら如来 のら如来 三のら如来に六のら如来。
 かわらなでしこ のせきちく、のらによらい のらによらい みのらによらいに むのらによらい、

一寸先のお小仏に おけつまずきやるな、細溝にどじよによろり。
 ちよつと さきの おこぼとけに おけつまずきやるな、ほそどぶに どじよ によろり。

京の生鱈 奈良生学鯉、ちよと四五貫目、
 きよ一の なまだら なら なま まなか°つお、ちよとし ご かんめ、

お茶立ちよ茶立ちよちやつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶筌でお茶ちよと立ちよ。
 おちやたちよ ちやたちよ ちやつと たちよ ちやたちよ、あおたけ ちやせんで おちや ちよと たちよ。

来るは来るは何が来る、高野の山の おこけら小僧、
 くるは くるは なにか°くる、こーやのやまの おこけらこぞ一、

狸百匹 箸百膳 天目百杯 棒八百本。
 たぬき ひやっぴき はし ひやくぜん てんもく ひやっぱい ぼ一 はっぴやっぼん。

武具・馬具・ぶぐ・ばぐ・三ぶぐばぐ、合わせて武具・馬具・六ぶぐばぐ、
 ぶぐ°・ばぐ°・ぶぐ°・ばぐ°・みぶぐ°ばぐ°、あわせて ぶぐ°・ばぐ°・むぶぐ° ばぐ°、

菊・栗・きく・くり・三菊栗、合わせて菊・栗・六菊栗、
 きく°くり°きく°くり°みきく くり、あわせて きく°くり°むきく くり。

麦・ごみ・むぎ・ごみ・三むぎごみ、合わせてむぎ・ごみ・六むぎごみ。
 むき°・ごみ°むき°・ごみ°みむき° ごみ、あわせて むき°・ごみ°むむき°ごみ。

あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。
 あの なヶ°しの なか°なキ°なたは、たか° なか°なキ°なたぞ。

向こうの胡麻がらは 荏のごまがらか、真ごまがらか、
 むこ一の ごまがらは えの ごまがらか、まごまがらか、

あれこそほんの真胡麻殻。
 あれこそ ほんの まごまがら。

がらびいがらびい風車、おきやがれこぼし おきやがれ小法師、
 がらび一 がらび一 かざぐ°るま、おきやか°れ こぼし おきやか°れ こぼ一し、

ゆんべもこぼして 又こぼした。
 ゆんべも こぼして また こぼした。

たあふぽぽ、たあふぽぽ、ちりから、ちりから、つつたつぽ、
 た一ふぽぽ、た一ふぽぽ、ちりから、ちりから、つつたつぽ、

たつぽたつぽ一丁だこ、落ちたら煮て食お、
 たつぽ たつぽ いっちょ一だこ、おちたら にてくお、

煮ても焼いても食わぬ物は、五徳鉄弓・かな熊童子に、
 にても やいても くわぬものは、ごとくてつきゆ一・かなぐ°まど一じに、

石熊・石持ち・虎熊・虎きす、
いしくま・いしもち・とらくま・とらきす、

中にも 東寺の羅生門には 茨木童子がうで栗五合 つかんでお蒸しやる。
なかにも とーじの らしよーもんには いばらきどーじか° うでくり ごんこー つかんで おむしやる。

彼の頼光の膝元去らず。
かのらいこーの ひざもと さらず。

鮒・金柑・椎茸、さだめて後段な、
ふな・きんかん・しいたけ、さだめて ごだんな、

そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発知、
そばきり、そーめん、うどんか、ぐどんな こしんぼち、

小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、小杓子、こ持って、
こだなの、こしたの、こおけに、こみそか°、こあるぞ、こしゃくし、こもって、

こ揃って、こよこせ、おっと合点だ、心得たんぼの川崎、
こすくって、こよこせ、おっと がってんだ、こころえ たんぼの かわさき、

神奈川、程ガ谷、戸塚は、走って行けば灸を摺りむく、
かながわ、ほどか°や、とつかは、はしっていけば やいとをすりむく、

三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、
さんりばかりか、ふじさわ、ひらつか、おーいそか°しや、

小磯の宿を七ツ起きして、早天早々相州小田原とうちん香、
こいその やどを ななつ おきて、そーてん そーそー そーしゆー おだわら とーちんこー、

隠れござらぬ貴賤群衆の、花のお江戸の花いろいろ、
かくれござらぬ きせん ぐんじゆの、はなの おえどの はな ういろー、

あれあの花を見てお心を、おやわらぎやっという。
あれ あのはなをみて おこころを、おやわらぎやっという。

産子、這う子に至るまで、此の外郎の御評判、ご存知ないとは申されまい。
うぶこ、はうこに いたるまで、この ういろーの ごひよーばん、ごぞんじないとは もーされまい。

まいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼうぼうまゆに、
まいつぶり、つのだせ、ぼーだせ、ぼーぼーまゆに、

臼・杵・すりばち、ばちばちぐわらぐわらと、
うす、きね・すりばち、ばちばち ぐわら ぐわらと、

羽目を弛して今日お出での何茂様に、上げねばならぬ売らねばならぬと、
はめを はずして こんにち おいで の いずれもさまに、あヶ°ねばならぬ うらねばならぬと、

息勢引っぱり、東方世界の薬の元締め、薬師如来も照覧あれと、
いきせー ひっぱり、とーほー せかいの くすりの もとじめ、やくしによらいも しょーらんあれと、

ホホ敬って、いろいろは、いらっしやいませぬか。
ほほ うやまって、いろいろは、いらっしやいませぬか。